



太刀魚

沢 麗子
(富山)

いつ来てもエプロン姿の母さんとわれを言ふ子よ己が子連れて
体温計脇にはさみてしづかなり孫はソファーに乙女の座り
弾かれないままのピアノが楽器店に飾られてゐるさはれる距離に
自宅から徒歩三分の図書館は二階にありてまるで隠れ家
病みがちな人ひとり住む前庭は身の丈超ゆる草むらとなる
スーパーに売られる地物の鰯の横モロッコ産の太刀魚ならぶ
死してのち海越えて来しモロッコの太刀魚売らるわたしの町に
新湊は橋おほき街神楽橋放生津橋を船くぐりゆく
飛び方を知らぬわたしはひるがへる午後のプールにターンする時
地下二階駐車場より上がり来て扉開ければまぶしい売り場
まだ雨に触れしことなき透明な傘は売り場にかたくたたまる
暮れすすむ農道に方位失ひて立山を背に帰り路いそぐ
義母の歩行助けてくれし花柄の杖は傘立てにいま静かなり
春くれば統合されるグラウンドに野球する子らの声澄む月夜
グラウンドの夜間照明消えゆきて野球する子らの声止む月夜

このごろの私
水泳教室に通って六年にな
るが、未だにクロールの呼吸
が上手くできない。今年こそ
克服しようと、コーチの助言
をメモしたり水泳本を読んだ
りしている。楽しく泳いでい
る自分を想像しながら…。



秋の庭にて

佐藤 玄

(神奈川)

このごろの私
もとから順応力の低い私は、
(コロナ禍)以後の社会や身
辺の変化に対応できぬままま籠
もり暮らしています。人間社
会とは無関係に、夜空に輝く
星々を見ていると、なぜか心
が安らぐこのごろです。

気力萎え籠もれるをとこ庭に出で花を愛でをり空見上げをり
マンシヨンと社寮の囲む底ひなる狭庭に仰ぐ空の明るさ

ゼラニウムからくも熱暑を生き抜きて枯れ葉の下より若葉のぞかす

十月の陽のさす庭にシジミチョウ、タテハ、セセリら舞へり憩へり

目前に雀ら舞ひ降り水飲めばわれはフリーズ 五分、十分

雀らを見送る空の全体が動くやうなり高いいわし雲

語るべき人をらざればわれ語らず秋の夜空の星物語

現在を生きつつ過去を直接に見るといふ贅、星を見ること

今われは四百三十年前を見てをり北極星^{ポラリス}あの黄の光

むらさきのノボタンの花びら庭芝の上に散らばる風さむき朝

侘び色の花とや言はんホトトギス木の下かげに一輪咲けり

六階の社寮を超えて照る影を見上げて拝す十三夜月

両手もて残花摘むなり咲き終へし月下美人のすがた愛^{かな}しく

色浅きピラカンサの実試食せり夕かげのなかジョウビタキ来て

いのちある身なれば見ゆる花の色、月の満ち欠け、星のかがやき